

121225 霜柱

久しぶりに「霜柱」を見ることができました。

子どもの頃、寒い朝の通学の途中、「霜柱」を見つけては“サクッサクッ”と踏みながら歩いたような記憶があるのですが、いつの頃からか、すっかり見る事が無くなってしまったような気がします。

寒い朝、芝生一面に「霜」がおりて真っ白になっているところは、今でも見る事がありますが...

ちなみに、「霜」と「霜柱」は似ているようですが、果たしてどこが違うのでしょうか？

「霜」は、晩秋から早春にかけて、寒くて晴れた日の朝に、窓や地面、芝生などに“降りる”ことがあります。

これは昼の間、大気中に含まれていた水蒸気が、夜間に気温の低下によって氷の結晶となり、先ほどのとおり窓や地面などの表面に付着したものです。

一方、「霜柱」は、地中の水分が、毛細管現象により地表に上昇しながら凍ったものです。

地上の気温が0以下になると、地表面の水分が凍ります。それより暖かい(0以上)土の中で、地中の水分が毛細管現象により次々と地表面にしみ出してきました。そのしみ出してきた水は氷となり、地表面の氷を押し上げるのです。

これが繰り返されて「霜柱」が形成されていくのですね。

まるで地面からニョキニョキ生えてきたかのような“氷の柱”、靴で踏めばバラバラ...という感じで簡単に崩れてしまいますので、寒い朝の通学途中、わざわざ霜柱の上を選んで、踏み荒らしながら歩くのは楽しいものでした。

この「霜柱」、最近見られなくなってしまったのは、地球温暖化やヒートアイランド現象の影響なのでしょうか...

でも、よく考えてみれば、いくら“地球温暖化”などと言っても“寒い朝”がなくなってしまった訳ではありませんので、もっと他にも理由があるはずです...

では「霜柱」がしやすいところとは、どのような場所なのでしょう？

「霜柱」の先端を見れば、そこに土の粒子を載せていることを考えると、強く踏み固められた地面や、芝生のような草の生えた場所ではなかなかできにくいのでしょうね。

畑や田んぼ、林道沿いなど、柔らかい土の層が広がっているところが、「霜柱」にとって“適地”だと言えるでしょう。

今や都会では、歩道までもが舗装されていますし、そもそも柔らかな土の露出している場所を見つけることすら難しくなっていますので、「霜柱」を見る事が無くなったとしても、当たり前なことなのかも知れません。

真冬に霜柱を踏みながら登校した思い出などを話しても、今の子どもたちには“霜柱っていったい何??”ということになってしまうのでしょうか...

写真 ~ : 田んぼで見つけた「霜柱」

写真 : 芝生一面におりた「霜」

写真は、万博記念公園で撮影







